



豊中市教育センター
〒560-0033 豊中市蛍池中町3-2-1-600
TEL 06-6844-5290～4
FAX 06-6840-8127

平成15年(2003年)9月5日 第4号

必見?火星の大接近

小さな望遠鏡でも南極の氷冠がよく見えます。

先月27日に火星が地球に約5576万キロまで接近しました。約6万年ぶりの世紀の大接近です。ここしばらくの間、日没後の南東～南の空を見上げると、-2.9等級の明るさでオレンジ色に輝く火星の姿を見ることができます。次は284年後の2287年まではやって来ない計算になります。そこで、各地の天文台が望遠鏡を向け日々観測をしているようです。



新聞や雑誌、インターネットで美しい火星の写真や詳細な記事を手に入れることができるようになってきました。学校など私たちの身近にある望遠鏡より、格段にすばらしい性能の望遠鏡で、しかも専門家が撮った写真なのですから、本当にすばらしいものが発表されています。こんな中、私たちや子どもたちが、わざわざ火星に望遠鏡を向ける意味や必要性があるのかとってしまうことがあります。

このことで、思い出すのは、平成6年(1994年)7月に木星の表面にシューメーカー・レビー第9彗星が衝突した時のことです。彗星の衝突の予測がされ、大々的に新聞等で報道されていたので、今回と同様、各地で観測され、天文台などでも観測されていたのです。私も家のベランダから望遠鏡を向け、その様子を観察していました。「詳しい様子は、新聞・雑誌等で後で見ればいいや、その写真の方が鮮明だろう」と軽い気持ちで見るとつもりでした。望遠鏡で覗いた木星の姿は、大赤斑と同じくらいの大きさの黒い斑点が現れ、次々広がっていく様子が確認できたのです。この様子を、いつまでも時を忘れて見ていたことを覚えています。木星に起きた大災害が、地球の我が家から、よく見えたのです。次の日、朝刊に天文台で写された鮮明な写真が載っていましたが、小さいながらも我が家の望遠鏡でのぞいたLIVE映像は、とても印象深いものでした。

今回の火星の超大接近では、南極の氷冠が白くよく見えるそうです。小さな望遠鏡でも表面の模様を見ることができるようです。この秋、これを機会に、望遠鏡を向け壮大な宇宙の歴史の目撃者になってみませんか。なにより、夜空を見上げ、子どもたちに宇宙の広がりや美しさ、不思議さを体験させたいいものです。(十河)

◆同定会と標本等の展示会

先月29・30日に教育センターでおこなわれた本年度の同定会では、標本の展示会も同時に開催しました。事前にテレビや新聞などのマスコミに取り上げられたこともあり、多くの見学者で賑わいました。

島田修さんの蝶の標本、手塚治虫さん、今中宏さんの昆虫の標本や標本用具を展示しました。

島田さんは、大正9年（1920年）に高知県に生まれ、昭和13年（1938年）金属関係の会社へ入社。会社勤めの傍ら、絵を描き始め、数々の個展を開かれました。また、昭和49年（1974年）蝶の蒐集に熱中され、昭和52年（1976年）インド旅行など数々の旅行を通して、スケッチや蝶の採集を行われました。今回の蝶の標本やスケッチは、インド旅行時のものです。

手塚さん、今中さんのお二人は、昭和16年（1941年）、大阪府立北野中学校（現北野高校）に入学し、動物同好会、六陵昆虫研究会を通じて交友がありました。

手塚さんは、大阪府豊能郡豊中町（現大阪府豊中市）で生まれ、本名は治（おさむ）と命名されています。

今中さんは、ご実家が和菓子の老舗を営んでおられ、動物同好会の会報第一号は、お店の邦文タイプを使って、発行したそうです。

今中さんとのエピソードの一つを手塚さんは「中学二年生のある日、今中宏君の家へ遊びに行ったときの事です。彼の部屋で遊んでいたら、隠居所から頭のはげたおじいさんがやって来たのです。顔をよく見たら、たいへんマンガ的な顔をしています。あとで「あの人はだれ」と彼に聞くと、彼のおじいさんだと言います。その顔がたいへん印象的だったので、おじいさんをモデルに、ぼくははじめてキャラクターを描きました。したがって、ぼくにとって一番古いキャラクターです。それが「ヒゲオヤジ」です。…」と語っておられます。

その頃、時代は切迫しており、すぐに太平洋戦争に突入。このような時代の中、採集された標本が今回の展示品です。採集年は、昭和16年～19年（1941年～1944年）というまさにこの年代のものです。

この後、終戦を迎え、手塚さんは、大阪の医専（現大阪大学医学部）に進学

特別展覧会 昆虫採集の思い出

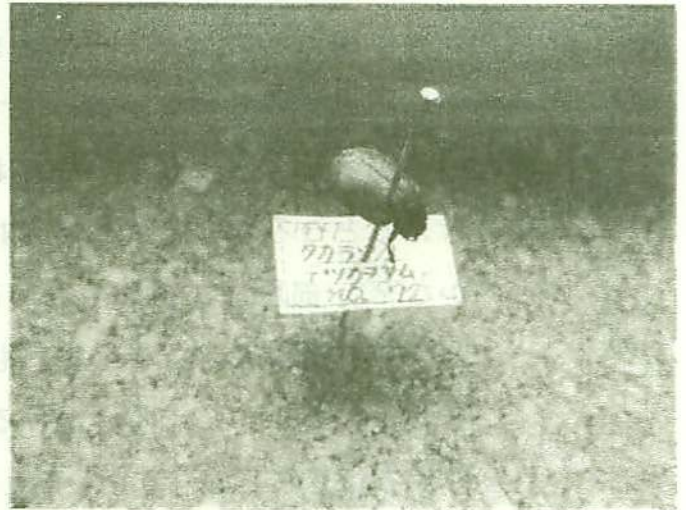
し、昆虫採集をやめておられるようです。

一方、今中さんは戦後も、昆虫採集を続けられていたようで、戦後採集した昆虫標本を多く残されています。

今回の展示の一つ”ドロノキハムシ”

この標本を8年ほど前に今中さんから、豊中市に寄贈いただきました。

その標本の中に手塚さんのものも含まれていました。60年前の友情とともに大切に保存されていたことになります。



◆タッチ・座・サイエンス

教育センターでは、今年度より科学教育の振興事業として、「タッチ・座・サイエンス」事業を実施しております。これまでの事業を発展させるとともに、今回の標本展示会のように、子どもたちの科学の興味をより一層引き出すような取り組みに展開していく予定です。

この夏行われた豊島公園での「豊中まつり」でも、「タッチ・座・サイエンス」事業の一環として、四中の自然科学クラブの協力を得ながら、スライムづくり、空気砲、液状化現象等の実演を行い、お祭りに参加した多くの子どもたちに科学の不思議を伝えました。

第49回 小中学生 理科展

と き 平成15年(2003年)9月17日(水)～21日(日)

午前10時～午後7時(20日(土)・21日(日)は午後5時まで)

ところ 豊中市教育センター(蛍池駅 ルシオーレビル6階)

※タッチ・座・サイエンス「科学教室」を同時開催

理科展開催中の20日(土)、21日(日)には、豊中四中自然科学クラブ、北野高校化学クラブ、産業技術総合研究所による実演を予定しております。

子どもと出会う時に

友達に乱暴をしてしまう子、学校に行こうと思うとお腹が痛くなる子、夜尿があって困っている子……。さまざまな悩みで教育相談に初めて訪れた子どもたちに必ず問う言葉があります。「ここは、困っていることがある時とか、嫌なことがあってどうしていいかわからない時に来て、そのことについて一緒に考えるところなの。Aちゃんは何か困っていることとか嫌なこととかあるのかな?」。部屋にあるおもちゃに飛びついてしまった幼稚園児にも、ブスーとして不機嫌そうな中学生にも、まず問いかけます。

このようにまっすぐに問いかけると、子どもの目の奥は静かに輝きます。返答の仕方はさまざまで、考え考え「学校を休んでるから……」「お友達がね、嫌なこと言ってくるの」などと語る子どももいれば、「ないことはないけど……。ちょっと言えそうもない」と精一杯返してくれる子どももいます。

「ないよ」「さあ」とあっさりと返事をしたあと大暴れし、自分がコントロールできないことを行動で示す子どももいます。また、返事もできずに固まってしまい、いろいろな場面で緊張しすぎて困っていることを教えてくれる子どももいます。中には、人形を取り出してケンカをする両親を再現することもあります。その脇には子ども人形の寄る辺ない姿……。

どの返答をとっても一人ひとり精一杯に教えてくれているのです。目の前にいる大人が何を知らうとしているのかを真っ先に示すことで、子どもは本当に的確に自分を表現してくれるものと日々実感させられます。

毎日子どもたちと向き合っておられる先生方も、ぜひ、「Aさんはどんなことで困っているの?先生もそのことが心配だから一緒に考えたいんだけど……」とまっすぐに問いかけてみてください。それから、子どもの反応をゆっくりと待つだけです。「大丈夫」「みんな待ってるからね」「気にしなくていいよ」などの安易な言葉かけよりも、このような姿勢をまず大人が示していくことが、遥かに子どもたちから必要とされているように思うのです。(松波)

